

## インタビュー

東京芸術劇場 芸術監督

# 野田秀樹



## 「東京演劇道場」、4月より本格始動

俳優養成の場であり、演劇をつくりたい人たちが出会うプラットフォームに。

野田秀樹の中で育っていた問題意識と、外側に増えてきた刺激が、ひとつになって動き出した――。

「東京演劇道場」は、そう言っていけないプロジェクトだろう。

NODA・MAPで取り組んできたアンサンブルの手応え。

東京芸術劇場で開催してきた俳優向けワークショップ。

芸劇eyesや多摩美術大学などでの若い世代との交流。

近年の劇団やプロデュース公演の変化。

それらを通して生まれた責任感や危機感が、有名無名を問わずオーディションで選んだメンバーを積極的な舞台俳優に養成する活動につながろうとしている。試行しながら決めていくことも多いのだが、前例のない挑戦は遂にスタート。1月25日の会見から野田のヴィジョンを聞いた。

### 時間をかけたWS形式のオーディション

野田がプロジェクトの構想を発表したのが2018年6月。9月1日に募集を開始し、11月10日の締め切りまでに、全都道府県から約1,700名の応募があった。厳正な書類審査を実施し、書類審査に合格した300名が第一次オー

ディション、そこからさらに120名が第二次オーディションに進み、最終オーディションを経て、正式メンバーに登録されたのは60名となった。内訳は男性28名、女性32名。年齢は18歳から49歳。演技経験ゼロの人も長いキャリアを持つ人も、また、俳優志望のみならず演出家志望者も混じる。

「応募者の数には驚きました。そんなに“迷える子羊”がいるのかと。でも時間の制約もありますから、全員には会えない。書類で落とさざるを得なかった1400名には本当に申し訳ない気持ちで一杯ですが、第一次オーディション以降はワークショップ形式を取って合計5日間かけ、かなり念入りにやったつもりです。選考は、自分だけだとしても趣味が偏るので、ノゾエ征爾さんや柴幸男さん、熊林弘高さんらの演出家、黒田育世さんや井手茂太さん、近藤良平さんらダンスの方たちにも審査に協力してもらって、もちろん最終的には自分の責任で選びましたけど、いろいろな意見をもらって決めました。熊林さんが執拗に推す人がいて、私としては可否ストレスはあったんですが、彼がそこまで言うのは何かあるのかもしれないと思って採用し、東京キャラバンのワークショップの時に来てもらったら、すごく良かった。やはり人の意見を大切にしてくれたということが早くもありました(笑)。ただ基準はそれぞれ違っても“この人、いいね”というのは、ほとんど意見が揃いましたね」

当初の予定より多い選考人数になったことからわかるように、手応えは大いにあったという。

「オーディションでやってもらったのは、例えば、最近の役者は、創作で一番大切な批評性を失っている気がするんで、こちらが出した3つの単語からひとつを選んで、批評精神をもってそれを表現してとか。あとは俳句を持ってきて、5、6人のグループで表現してくださいといった課題です。非常に面白い役者さんが集まってくれましたよ。やる前は、20代とか若いほうがいいなと思っていましたが、おもしろい人を選んでいくと30代が中心になりましたね」

### 私がやってきた方法はすべて伝える

今後は、野田を含めた演出家の指導でワークショップを開き、そこに参加してもらいながら、メンバーによる公演も視野に入れている。

「ワークショップをやるばかりで先々の目標がないのもどうかということで、来年、あるいは再来年を目指して、公演を打てる形になっていけばいいなと思います。ただ、こればかりは能力次第というところもありますから、今から明言はできません。やるとしたら、自分の過去の戯曲が良いと考えてはいますが。というのは、私の若い時の作品は身体性と非常につながりが強いものが多い。それを身体が動く若い人たちにやってほしいと思いますし、今の日本の芝居全体をよく知っているわけではないんですけど、身体性の方向よりも、言葉の力というか、日常的な会話で進められているものが多い。演劇にはそうではないものもあるということを知ってもら意味でも、若い時に書いた戯曲を使いたいと思っています。その先にはもしかしたら、自分の新作をやってもらうこともある気がします。

もちろん演出家である立場としては、興味があるのは作品をつくる方向ですが、それにあたっては、集まった人たちが身体性に関する共通の文法を持っていないといけません。そこを伝えていくのがこの道場の大事な役割ということです。舞台の上に垂直に立つとはどういうことか。役者の立ち方で空間がどう変わっていくか。それらを知り、できるようになるのは、作品づくりとは別にやっておかなければならない課題です。そのためには、今まで私がやってきた方法はすべて伝えようと思っています。ただ、私のやり方だけがすべてではないですし、役者によっては、僕のやり方とは違うところで輝く人もいるはずなので、その場合は他の演出家さんのところで活躍してもらえば良いでしょう」

### 東京演劇道場が目指すものとは

ところで、東京演劇道場というネーミングは、ポスター・ちらしを手がけたグラフィックデザイナーの佐野研二郎氏との会話で出てきたものだという。



「その名前が出てきた途端、一瞬にして自分もやりたいことがわかった気がしてありがたかったです。学校よりももう少し自主性があるというか。教える人のことも“先生”ではなく“師範”と呼んだり、講師の代理を務める人を“師範代”と呼ぶような遊び心も、パッと浮かびました。また、これは冗談でもないんですが“道場破り”があってもいいなと思っているんです。チラッと話をしたら興味を示してくれたのでお名前を出しますけど、白石加代子さんが道場破りに来たら、道場生たちの間で何が始まるだろう、という展開があったらおもしろいですよね(笑)。

メンバーになった人たちには最初に伝えましたが、「東京演劇道場」は、俳優を養成するという目的がありつつ、基本的に演劇のプラットフォーム、つまり、演劇をやりたい人たちが出会う場所になってほしいと私は考えているんです。もちろん私、野田秀樹と出会うこともあるけれども、講師を依頼する別の演出家さんに出会うこともあるでしょうし、道場に集った人たちが出会ったことで、彼ら同士の創作が始まっていい。自分たちだけでもやれるぐらいのクオリティを持った人を選んだつもりなので、少し動きだしたら背中を押すやり方もありますね。道場生の人たちはここを使えますよ、という具体的な場所を差し出すのも、劇場がこういうことをする意味ですから」

俳優の底上げ、公共劇場の役割、集団創作の価値など、野田が投げた小さな石の水紋は、どこまで広がるか。その行方を丁寧に見つめていきたい。

構成・文：徳永京子  
撮影：三浦一喜

### 野田秀樹 HIDEKI NODA

劇作家・演出家・役者。東京芸術劇場芸術監督、多摩美術大学教授。92年に「劇団 夢の遊戯社」を解散後、ロンドンへ留学。帰国後の93年に演劇企画制作会社「NODA・MAP」を設立。以来『キル』『赤鬼』『パンドラの鐘』『THE BEE』『ザ・キャラクター』『エッグ』『逆鱗』『足跡短』『One Green Bottle』など話題作を次々と発表。モーツァルト歌劇『フィガロの結婚-庭師は見た!-』等、オペラの演出も手がけるほか、海外の俳優やスタッフとの共同制作による英国版『One Green Bottle』を東京、韓国、ロンドン、ルーマニアで上演し大きな反響を得る。演劇界の旗手として枠を超えた精神的な創作活動を行う。2015年よりブラジル、東北、東京、京都、などで、国内外の多種多様な表現者達と新たな幻想的な表現を創出する文化サーカス「東京キャラバン」を実施。2018年NODA・MAP第22回公演『廣作 桜の森の満開の下』を東京、大阪、北九州、パリで上演し好評を得ず。2019年4月5日より、松竹シネマ歌舞伎「野田版 桜の森の満開の下」が全国で上映決定。2019年秋には新作公演を予定。世界を駆け巡り、意欲的に活動を展開している。